

2015 vol.32 春号 源流からのたより

ぽたいたい!

源流のひとしづく



CONTENTS

- ・事務局長コラム
- ・「源流学」⑦
- ・源流の主役たち
- ・吉野林業の歴史～修羅～
- ・吉野川紀の川しらべ隊
- ・神戸夙川学院大学の8年間



森と水の源流館



住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
公益財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

平成27年度の取り組みに向けて

あらためて協働型事業へのチャレンジ

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局長 尾上 忠大



平成26年度もまもなく終了します。「第5回全国源流サミット」や「第34回全国豊かな海づくり大会」などにかかわる取り組みが印象に残る年でした。そしてひと息つく間もなく新年度へと突入します。前年度の大きな催しの成功を通じて、

り立つような特産品交流のしくみを構築していきたいと思えます。まさに「流域圏」発想の具現化です。恒例の「源流まつり」もみんなでそのような意識で、実験の場になればと考えます。

多くの人々と共有することができた「真の流域連携」「森から海へのつながり」をどのように発展させられるかが、次年度の肝となると考えています。毎年定番となった「水源池の森ツアー」や「吉野川紀の川しらべ隊」「源流のつどい」などは継続実施をしながら、いくつかのチャレンジを試みたいと思っていますので、その一部をここに記し、有言実行をめぐります。

吉野川紀の川スタイル

流域連携モデル構築のための協働調査

源流サミットにおいて提言のあった流域間でのモノの行き来の促進について、少し基盤ができてきたところ、ヒトの行き来をいかに、共通の課題、固有の課題を相談しながら、上流から下流、下流から上流がお互いを意識し、支え合うことで成



イメージ

旧白屋地区の定期観察(各季)

昨年度から川上村で始動している「水源池の村 未来への風景づくり」は、企業や団体の協賛を得て、現地に残る石積みをかき、各々の庭園づくりによって、かつての人のぬくもりを感じさせる景観を再生しようとするものです。このプロジェクトの立ち上げ段階では、筆者もかかわっていますが、いよいよ財団総動員、ネットワークを駆使してこのプロ



旧白屋地区「未来への風景づくり」現地

ジェクトを盛り上げていきます。「しらべ隊」等のノウハウを用いて、季節ごとに、植物や昆虫の観察を行い、フィールドの変化を参画団体へレポートします。またこの観察にも多くの人が協働参加ができる展開をしたいと考えています。

「源流学的キャンブ講座」

ゴミのない、きれいな河川環境は水源池の村の宝です。これを守りながら自然と親しみ、楽しく過ごすキャンブの方法について考えていただく講座で



キャンブ後、川原に残されたゴミ

す。これまでの源流ワークショップや山小屋での宿泊講座などでは比較的、山や自然を愛する環境意識の高い方々が対象であったと思いますので、より視線を低く、裾野を広げ、しかも水源池の村の課題にマッチした内容で、駐車マナー、火やゴミの始末や、キャンブ道具の工夫など、観光と環境の向上に寄与するイベントとなるよう試みます。

既卒者向けインターン受け入れ

本財団の理念である、流域をはじめ都市部の人々と水源地域を結び公益利益に寄与するためには「結ぶ」職能を持った人材が不可欠です。新年度では、自らの企画力と実行力、そして問題解決能力を用いて、テーマに向かうことをめざす人とともに、この地域や流域の資源、組織のノウハウも活用してもらいながら、年度末までいっしょに取り組みたいと考えています。

今

年は弘法大師が高野山を開いて1200年の記念の年だぞうだ。わしが住んでいる川上村の柏木にも、弘法大師にまつわる話があることをみなさんはご存知かな。子どもの時分に母から聞いた話だが、その昔、弘法大師が諸国を説法している時に柏木にも立ち寄られたそうで、喉が渴いた弘法大師は、一服の茶を所望したそうなの。柏木の人は、快くお茶を差し出すと、弘法大師は、茶のお礼にと、「この地（柏木）でとれる茶は、他の集落の茶より美味しい茶ができる地にしてやろう」と言われたそうなの。それ以来、柏木の茶は、他より美味しい茶がとれる所となり、茶摘みの時には、「一枚の葉も落としてはあかん。お大師さんに罰があたるでな」と、母によく言われたものである。今にして思えば、柏木地区に伝わる弘法大師の水伝説になぞらえたものだったかもしれないが、要するに、一枚の茶葉も祖末にしてはいけないという、先人の教えだったと思う。そういう「いわれ」もあるが、やっぱり柏木の茶は、他の集落の茶よりも一



煎りたての熱々の茶葉をしっかりと揉むことでおいしいお茶になる

茶

摘みの話は、ぼたり26号でも話したが、もうちょっとわが家の茶と暮らしのかかわりについて話をしたいと思う。わが家では生活必需品の一つであるお茶と野菜は、他から買わず、昔から自給自足で賄っている。毎年5月下旬ごろより茶摘みが始まる。昼間、母や姉が摘んだ茶葉を、夜、甌（こしき）で蒸して、手で揉む作業をわしが担当していた。今は鍋で煎って手揉みするが、いずれも一番つらいのが、揉んでいるときに、手が熱いことで、こればかりは、熱いうちに揉まないで、良い茶ができない。今でも、時々、手を水につけながら、揉んでいる。若い頃は、今と違って、揉む量も多く、10日ほどかかっていた。わしが結婚するまではテレビも自動車もない時代で、夜の楽しみといえば、若者たちが集ってわいわい騒ぐのが楽しみだったが、茶摘みの間だけは、夜遊びに行けなくて、残念だったわ。

段とおいしいと思ってる。

達ちゃんが語る

子どもたちに伝えたい「源流学」⑦わが家の茶の文化



そ

の大量に作られた茶は、三度、三度の食事の一つに出る茶がゆ（わしらは「オカイ」という）で使う。わしは今でも日に一度は「オカイ」を食べなかつたら、日が暮れないと言ったほどのオカイ通である。夏の暑い時は、冷たい「オカイ」に

キュウリの浅漬けで食べたら、天下一品のご馳走や。



中に湯煮した茶袋をいれ、ぐらぐらに沸かし、立って湯が吹き出したら、湯が吹き出さないように火加減を注意することや。時々、お玉で鍋の中をかき混ぜ、だいたい30分ほどすると、米粒が長くなってくるのを見計らって火を落とす。この火を落とす時のタイミングが一番肝心や。炊き過ぎるとオカイがドロドロになるし、逆に炊き足らんかったら、米粒が固くて食べられない。いろいろと話したが、結局は長年の勤がものを言うに尽きる。あと、美味しい「オカイ」には、やっぱり使う水と茶も重要や。ほかのところでも「オカイ」を食べる機会もあるが、やっぱり山の谷の水とわが家の番茶でつくる「オカイ」が一番やなあ。おいしい水が手に入ったら、番茶も用意して、ぜひ試してほしい。

せ

っかくやから、わが家のオカイの炊き方を伝授しよう。①まず最初に鍋に水を入れる。米の分量に応じた水加減が大事や。だいたい米1合に水9合の割合。②次にサラシの布で作った茶袋に番茶をひとつかみ入れ、しっかりと袋の入り口をしめておく。③茶袋を鍋に入れて、強火にかける。湯が沸騰し、てくると、鍋のふたをとって、



茶袋を入れたまま、軽く1回洗ったお米を入れ、ぐつぐつ煮る

を、とって、

最後に細かい泡が沸き立ってきたら、火をとめる



最後に細かい泡が沸き立ってきたら、火をとめる

10分間ほど、そのまま炊くと、茶がよく出て、きれいな茶色になる。④そこに、軽く洗った米を入れ、沸騰させる。くれぐれも1回ぐらいすすぐ程度に。それから気をつけやなあかんのは、湯が吹き出さないように火加減を注意することや。時々、お玉で鍋の中をかき混ぜ、だいたい30分ほどすると、米粒が長くなってくるのを見計らって火を落とす。この火を落とす時のタイミングが一番肝心や。炊き過ぎるとオカイがドロドロになるし、逆に炊き足らんかったら、米粒が固くて食べられない。いろいろと話したが、結局は長年の勤がものを言うに尽きる。あと、美味しい「オカイ」には、やっぱり使う水と茶も重要や。ほかのところでも「オカイ」を食べる機会もあるが、やっぱり山の谷の水とわが家の番茶でつくる「オカイ」が一番やなあ。おいしい水が手に入ったら、番茶も用意して、ぜひ試してほしい。



灰汁をしっかりととりながら、米粒が長くなってきたらあと少し

※連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。

高点は1780m（大普賢岳）もあり、高山に乏しい近畿地方では希少な亜高山性の種も分布しています。また、村内に分布する古い地層、秩父帯には、石灰岩の地層が多く含まれますので、石灰岩地にのみ生育するような珍しい種も多く見られます。

忘れてはいけないのが、人と自然の関係の豊かさです。川上村では、昔から山の恵みを最大限に活かし、自然と共存した豊かな里地里山環境を維持してきました。そういった、環境が守ってきた種も川上村ではまだ見ることができます。

ここでは、ほんの少しですが、川上村の貴重なコケ植物を紹介してみたいと思います。

4-1. 亜高山性のコケ

川上村には亜高山帯の針葉樹林を有するので、当然亜高山性のコケ植物が見つかります。セイタカスギゴケ（図1）は高さ約20cmに達し、日本で一番背の高いコケ植物です。近畿地方では兵庫県氷ノ山、和歌山県高野山の他には奈良県の亜高山帯にしか見つかっていません。川上村では、約500mの低標高で見つかり、これは近畿地方においては特筆すべき低標高での記録となっています。ほかに、フジノマンネングサ、イワダレゴケなどがあります。

4-2. 南方系のコケ

東南アジアなど亜熱帯に分布の中心を持ち、日本が分布北限となるようなグループで、川上村には枝からたれさがる懸垂性のハイヒモゴケ科の仲間やコキジノオゴケなどの美しい種が見つかります。三之公や神之谷で見つかったタマコモチイトゴケ（図2）は、種としても、このグループ（属）としても生育北限にあたります。かつて、大滝ダム水没前の丹生川上神社上社の石垣に旺盛に見つかったタチチョウチンゴケ（図3）という超希少種もこのカテゴリーに入ります。残念ながら、たくさんは残っていませんが、村内の神社の鎮守の森などにひっそりと残っています。

沢沿いで見つかった隔離分布種、カシミールクマノゴケ（図4）は従来大台ヶ原山麓で見つかったのみでしたが、今回の調査で蜻蛉の滝など村内の意外と身近なところに生育していることがわかりました。



図5. オオミズゴケ
(*Sphagnum palustre*)

4-3. 湿地のコケ

川上村には、オオミズゴケ（図5）、ホソバミズゴケ、ホソバミズゴケの3種のミズゴケ類が見つかり、このうち、ホソバミズゴケは本邦唯一の南方系のミズゴケとして知られています。

川上村で見つかったオオミズゴケは水の滴る石灰岩岩壁の下で見つかったもので、生態的に特筆されます。石灰岩は塩基（アルカリ）性なのですが、オオミズゴケは本来、酸性の貧栄養湿地を好み、花崗岩質の地層でよく見つかるので、非常に興味深い例と言えます。



図6. キブリハネゴケ
(*Pinnatella makinoi*)

4-4. 石灰岩地のコケ

理由は省きますが、石灰岩地には分布の限られた種や生育南限、北限などになっている種が多く見られます。川上村では、柏木周辺にまとまった石灰岩地が見られることから、セイナンヒラゴケ、ホソヒラゴケ、タチヒラゴケなどの希少種が多く見られます。今回の調査で見つかったキブリハネゴケ（図6）は近畿地方のみならず、奈良県でもかなり分布の限られた種です。



図7. カサゴケモドキ
(*Rhodobryum ontariense*)

4-5. 人里のコケ

珍しいものは人の手の入らないような深山幽谷に見つかるイメージされる方が多いことだと思いますが、里地里山環境に依存して生育している種もあります。下多古のミヤマハイゴケは、大規模な改修を受けずに地域の皆さんが代々守ってきた摩耗した石垣という生育環境に依存しています。高原のカサゴケモドキ（図7）は、一部新聞報道にあったように、「定期的な草刈り」という集落を守る活動によって背の低い草地在りによって背の低い草地在りによって生き残ってきました。

（参考文献）

Deguchi, H. (1984) Study on *Theriotia kashmirensis* (Diphysciaceae, Musci). Bull. Nat. Sci. Mus. series B. 10(3): 143-152.

National Science Museum, Tokyo.

木村全邦・佐久間大輔（2008）大阪府の蘚類－中島徳一郎蘚類コレクション－. 大阪市立自然史博物館, 大阪.

木村全邦（2014）奈良県新産のカサゴケモドキ. 蘚苔類研究 11(2): 45-46.

山本岳夫（2014）貴重なコケ守った集落の暮らし. 産経新聞奈良版 10月16日鹿角抄紙面.



川上村で見つかっためずらしいコケ植物

～奈良県レッドデータブックの調査から～

奈良県では、2016年度に現在の奈良県版レッドデータブックの改訂版を出版予定です。その調査を通じて川上村で見つかったコケ植物を少しだけ紹介し、川上村の自然の特性について紹介してみたいと思います。

木村全邦（森と水の源流館・奈良県レッドデータブック改訂植物分科会委員）

1. レッドリストとレッドデータブック

報道で、絶滅危惧種などを紹介されているのを聞いたことはありませんか。この絶滅危惧種は、レッドリストの中の絶滅危険性のカテゴリーのことを指します。絶滅危険度の高い方から、絶滅・野生絶滅・絶滅危惧・準絶滅危惧と区分するのが一般的です。

1966年に国際自然保護連合（IUCN）が世界で初めて「絶滅の恐れのある野生生物種」のリストを公表しました。このリストの表紙が赤かったことから、レッドリストと呼ばれるようになりました。レッドデータブックとは、レッドリストに掲載された種のこと詳しく書かれた本のことを指します。

日本では、環境省が1991年に「脊椎動物」版レッドデータブックを出版したのを皮切りに、2000年に2006年に「昆虫類」を出版し、9巻を完成させ、その後改訂作業が進められています。

2. 奈良県版レッドデータブック

国内版が発行されて以降、地域性を反映した、都道府県版のレッドリストやレッドデータブックが自然保護関連部局を中心に発行されるようになりました。全国では普通にしているものでも、ある地域では、気候風土や人間生活の関わり方の違いなどによって、絶滅の危険性が高いものもあります。郷土の自然を守るためには地域性を考慮する必要がありますので、当然の流れといえるでしょう。

奈良県では「大切にしたい奈良県の野生動植物～奈良県レッドデータブック」として、2006年に脊椎動物編が、2008年に昆虫・植物編が発行されました。残念ながら、47都道府県の中で最後の発行となりました。内容についても、近畿地方の他府県で取り扱われている、陸産貝類、淡水生貝類、クモ類、蘚苔類（コケ植物）、菌類などが対象から外れたままでした。

そこで、脊椎動物版発刊から10年の2016年に、改訂版の発行をめざし、現在調査・研究活動が行われています。改訂版では、蘚苔類（コケ植物）、菌類が新たにリストに加えられることとなり、コケ植物は私と広島大学の出口博則博士（特任教授）と私が担当することとなり、文献調査や現地調査を実施してきました。

3. 奈良県のコケ植物

これまでの調査の結果、奈良県には779種のコケ植物が記録されていることがわかりました。これは、日本に生育するコケ植物の種数の約46パーセントにあたります。日本のコケのほぼ半分は奈良県で見ることができるという計算になります。おとなりの大阪府では、536種であり、極めて種数が多いことがわかります。

この理由は、奈良盆地を代表する低地の平野部から近畿の屋根ともいわれる大峰山脈・大台山地の亜高山帯までを含む起伏に富んだ自然環境を有することだと考えられます。特に亜高山帯の高山に乏しい近畿地方の他府県と比較すると、種数において明らかな優位性を持っています。

4. 川上村のコケ植物相の特徴

川上村では、低山地の渓谷沿いには、温暖・多雨の影響で亜熱帯性の種が多く生育しており、「吉野川源流・水源地の森」の渓谷部が代表しています。水源地の森ツアーに参加した人が、「屋久島みたい！」と、その景観に驚かれるのは、同じような種が分布していて、景観にも影響しているためです。さらに、大峰山脈・台高山地の峰々に囲まれていることから、最



図1. セイタカスギゴケ
(*Pogonatum japonicum*)



図2. タマコモチイトゴケ
(*Gammiella tonkinensis*)

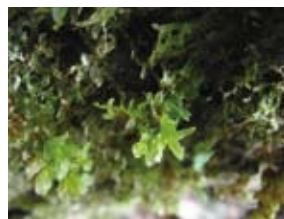


図3. タチチョウチンゴケ
(*Orthomnion dilatatum*)



図4. カシミールクマノゴケ
(*Diphyscium kashmirensis*)

その十九

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

吉野林業の歴史

修羅

丹生川上神社上社の拝殿横に杉丸太で作った滑り台が置いてあります。これは「修羅」のミニチュアで、平成26年11月16日の「第34回 全国豊かな海づくり大会 くやまとう」の歓迎・放流行事に用いられたものです。

歓迎・放流行事の場に川上村が選ばれたので、吉野林業と川上村を象徴するものとして、辻谷達雄さんが当時の記憶を頼りに作り上げました。

海づくり大会では、この「修羅」の上をアマゴやアユが大滝龍神湖に向かって滑り落ちて行きましたが、本来はもっと巨大な装置で、丸太を山から吉野川に滑り落していました。

『吉野林業全書』（1898年）にも紹介されており、「木馬」（ぼたり23号で紹介）より以前から用いられていた搬出方法です。

明治18年（1885年）、探検家で北海道の名付け親として有名な松浦武四郎（1818～1888年）は大台ヶ原探検に赴く途中に見た光景を以下のように書き残しています。

「大滝村（中略）過ぎて杉原に入る。

しばしにて下の川端にてホーイと呼ぶ声するや否、山上よりカラ、と数十の雷一時に落来ると思音有る故に、仰向て見上れば遙の山峰より杉丸太もて樋寛の如く作りし上を何か転落来る。是杉丸太なり。此材木下の川原に落るや是を鳶

口もて吉野川に流し置。またホーイと呼なり。其声を合図に上より材木を落す。是またカラ、と落来る。佇見る間も十本斗も下げたり。其合図よく手練せしものにて昔しより是にて怪我なせしものなしと。（後略）（『乙酉紀行』）

「修羅」を使った御放流の様子（川上村宮の平 平成26年11月16日）

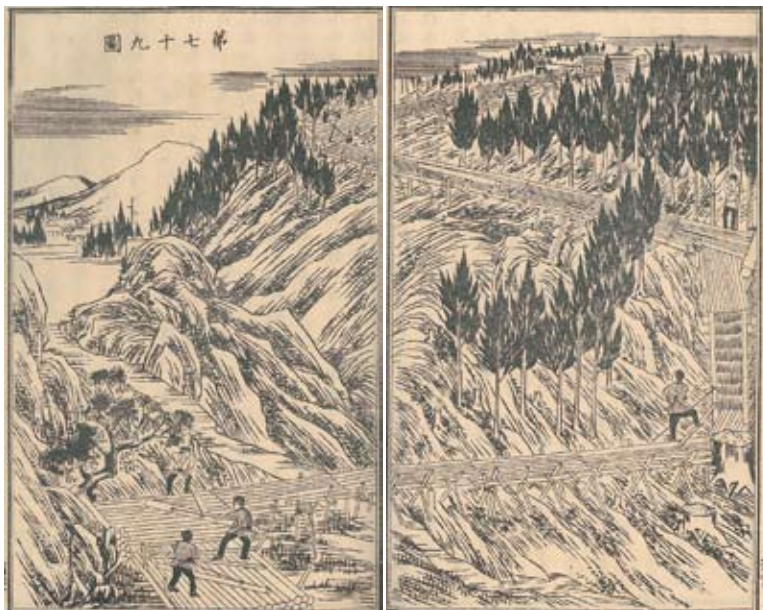
「修羅」は仮設の滑り台であるため、痕跡が残る木馬道とは違って、当時の写真や絵画、実際に目にした人の記憶にか残っていません。興味ある方は、参拝とともにご覧ください。



「修羅」を使った御放流の様子（川上村宮の平 平成26年11月16日）



「修羅」と土場（川上村大滝付近？ 昭和8年以前）



「修羅」の絵（『吉野林業全書』 明治31年 所収）



2014年9月21日(日) 13時30分～16時30分
近鉄吉野駅から七曲りの坂を上って、吉野山に見られる昆虫や植物などいろいろな生き物を観察しました。環境省近畿地方環境事務所の後援をいただき、当日は尾上聖子さん(奈良植物研究会)、古山暁さん(和歌山大学大学院生)、杉本正太さん(環境省近畿地方環境事務所吉野自然保護官事務所)を講師に迎え、参加者8名で実施しました。



1. 七曲りの坂をのんびりと自然観察
いて物れるとき「ひつつ
て解る呼ば虫」目立つ
につ植ば」秋に特

古山さんからは、秋の虫を多方面にわたって教えていただきました。特に専門のトンボでは、秋になると平野部でもたくさん見られるアキアカネとナツアカネの見分け方をわかりやすく解説していただきました。尾上さんには、秋の野草

説明していただきました。当日観察した「ひつつき虫」は、アカネ、メナモミ、コメナモミ、キンミズヒキ、ミズヒキ、イノコツチ、チヂミザサ、センダンゲサ、ヌスビトハギの10種を数えました。



4. シシウド



3. キンミズヒキ



2. ヒガンバナ



七曲りの坂は、普通に歩けば20分ほどの道のりですが、生き物観察をしながら登ると、2時間半もかかりました。じっくりと観察を指導していただいた、講師の皆さんに感謝します。



6. オニヤンマ



5. ツマグロヒョウモン

当日観察できた生き物リスト

- (両生類) トノサマガエル
- (昆虫) コカマキリ、オオカマキリ、アオバハゴロモ、ニイニイゼミ、ミンミンゼミ、ダルマカメムシ、ツマグロオオヨコバイ、カメムシの一種、ゴミムシの一種、コアオハナムグリ、オオセンチコガネ、センチコガネ、キアゲハ(幼虫)、モンキアゲハ、ゴイシジミ、ベニシジミ、ムラサキシジミ、ダイモウセセリ、チャバネセセリ、ヒメウラナミジャンボ、ジャノメチョウの一種、コムスジ、ツマグロヒョウモン、ミドリヒョウモン、メスグロヒョウモン、キシタヤガ、アキアカネ、ナツアカネ、カの一種、アシナガバチ、クマバチ、オンブバッタ、セスジツユムシ、クビキリギス、ツユムシ、アオマツムシ、モリオカメコオロギ、ハネナガイナゴ、ショウリョウバッタ、ヤマトフキバッタ、モリヒシバッタ、アオスジアゲハ、
- (クモ類) ジョロウグモ
- (貝類) クチベニマイマイ
- (植物) アカネ、カゼクサ、チヂミザサ、イラクサの一種、アオミズ、ミヤコミズ、ミヤマウド、オオバコ、ヨシノアザミ、オナモミ、センダンゲサ、コメナモミ、メナモミ、ツルボ、イヌコウジュ、アキチョウジ、シシウド、イヌタデ、ミズヒキ、ツククサ、アメリカイヌホオズキ、キンミズヒキ、ダイコンソウ、ヒガンバナ、ヤマノイモ、イノコツチ、イヌワラビ



8. ショウリョウバッタ



7. ナツアカネ(左)とアキアカネ(右)



10. ひつつき虫について説明する尾上先生



9. 華やかなアミさばきの古山先生

川上村にお世話になった
神戸夙川学院大学の8年間

神戸夙川学院大学
准教授 河本大地

「ありがとうございます。」
2015年3月で歴史を閉じる、神戸夙川学院大学。神戸のポートアイランドにある、観光文化学部だけの、小さな大学です。

この大学ができたのは、実はたったの8年前。私はその時から、この教員を務めてきました。専門は地理学、農山村地域研究。生まれも育ちも岡山県の田舎です。田舎の価値を、中の人にも外の人にも知ってもらえるようにしたい！その気持ちの原点としてあります。

川上村との出会いは、2007年の1月。関西にほとんど縁のなかった私は、神戸で就職するなら知り合いを増やしておきたいと思い、兵庫県三田市で開かれた環境教育の集まりに参加しました。「自然環境保全論」という科目を、日本の森林や山村について体験を通じて学ぶ形にしたい！二次林（里山林）なら神戸の周りにもたくさんあるが、人工林・林業や原生林、山村の暮らしについて学べる場所はなかなかあゝ。そう話していると、森と水の源流館の木村さんがお声をかけてくださいました。「川上村がええで。」

そうして毎学期おこなうことになった、1泊2日のエコツアー。毎回少しずつ内容は異なりますが、写真で様子をご覧ください。

1. 大和上市駅に集合し、源流館経由で三之公にある「水源地の森」へ。森の見た方を学びます。



2. 宿泊はいつも朝日館。歴史の詰まった吉野建ての建築、きれいなお庭、「おんどさん」で作られた自家製ゆず羊羹やごはん、薪で沸かすお風呂、そしてなにより女将さんのお話が魅力です。学生が雨天時に作ったベンチも、街道沿いに置いてあります。



3. 2日目の朝は、たいいてい柏木とその周辺を散策。薪割りをしたり、後南朝の史跡を訪ねたり。

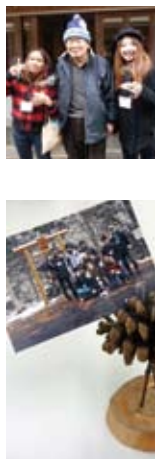


4. ここ3年は毎回、上谷へ。神社の境内、参道等の清掃をさせていただいたり、

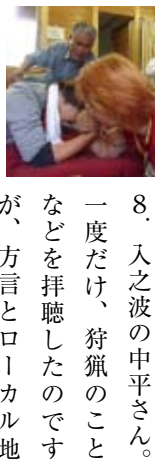
お宅にお邪魔したり、薪割りをしたり。
5. 杉林の300年生の杉林や源流館を見学し帰途につきます。



6. 柏木の浦本さん手作りの木工作品に感謝！



7. 学生が腕相撲など始めると、達っちゃんも黙っておられませんか！



8. 入之波の中平さん。名と専門用語についていくのは困難を極め。川上村は奥深いです。またの機会に！



なお、4月から縁あって奈良教育大学に勤めることになりました。川上村の皆様、今後ともよろしくお願いたします。

源流人募集



源流人とは

かけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは

集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,000円
団体	10,000円

年会費 郵便振替 00940-1-331163

もりもり 水源地の森守募金
にご協力ください



ありがとうございました。

平成25年度、153,835円の森守募金をお預かりしました。奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学

4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。今後ともご支援をよろしく申し上げます。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

「表紙の写真：新緑の柏木のダイチョウ」
柏木地区にある樹高約22m、幹回り4.22mの堂々としたイチョウの大木。新緑も紅葉もきれいです。

発行日：平成27年3月発行
発行所：公益財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館
TEL:0746-52-0888